

GLOBAL MEDIA STUDIESと実践知:横浜市寿地区 周辺の海外向け観光情報サイトの制作

(英文名: Global Media Studies and Practical Wisdom: Creating an information website of Kotobuki-cho area in Yokohama-city for tourists from abroad)

1. 研究目的

本プロジェクトは、GMS学部生が日頃学んでいる英語・IT・メディア教育の成果を社会的課題の解決に生かす場を提供する。具体的には、GMS学部生全体から30名程度募集し、横浜市中区寿地区のまちづくりに貢献しているソーシャルビジネス「Yokohama Hostel Village (YHV)」の活動を、情報発信の面からサポートするという課題を与える。YHVは寿地区の既存の簡易宿泊所を生かした宿泊所の運営を行っており、外国人観光客等を町に呼ぶこむことに成功している。英語による寿地区周辺の観光情報サイトを制作することで、外国人観光客の利便性を高め、YHVのまちづくりをより魅力的なものにしていく。なお、本プロジェクトは、株式会社富士通総研「実践知研究センター」と共同で行う。実践知研究センターは、経営学者の野中郁次郎氏(富士通総研経済研究所理事長、一橋大学名誉教授、カリフォルニア大学バークレー校経営大学院ゼロックス知識学特別名誉教授)のもとで富士通の次世代リーダーを育てる組織。実践知研究センターの研修ノウハウを活用し、GMS学部生が大学で学んだ技術・知識を現実の課題解決に生かす知識創造のプロセス(実践知)を経験することが本プロジェクトの最大の目的である。

2. 研究期間

2012年8月1日～2015年3月31日

3. 研究代表者 氏名・所属・職名

絹川 真哉 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部准教授

4. 研究分担者

氏名 所属・職名(本務先がある場合はその所属・職名) 役割

石橋直樹 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部講師 学生指導

吉田尚史 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部准教授 学生指導

浜屋敏 株式会社富士通総研 経済研究所 上席主任研究員、実践知研究センター 副センター長 学生指導

大屋智浩 株式会社富士通総研 経済研究所 上級研究員 学生指導

新福 啓 4 ウェブ開発

奥貫 真知 4 ウェブ開発

洪 承辰(スンジン) 4 コンテンツ制作

宮川 貴行 4 コンテンツ制作

鈴木 章浩 4 コンテンツ制作

今村 史佳 4 コンテンツ制作

根本 梨沙 3 コンテンツ制作

杉井 みのり 3 コンテンツ制作

大城 ヨシ 3 コンテンツ制作

城戸 一馬 3 コンテンツ制作

田澤 瞳 2 コンテンツ制作

武井 佑亮 2 コンテンツ制作

平賀 ゆりあ 2 コンテンツ制作

斎藤 智恵美 1 コンテンツ制作

内山 はるか 1コンテンツ制作
三橋 音人 1コンテンツ制作
二星 義知 1コンテンツ制作

GMS DIGITAL FABRICATION 普及プロジェクト

(Digital Fabrication in Global Media Studies)

1. 研究目的

GMSにおける3DプリンターをはじめとしたDigital Fabrication の普及を目的とした諸活動を行う。主な活動は、GMS学部の教員ならびに学生を対象とした、1)3Dモデリングソフトウェアの使い方のチュートリアル機会の提供、2)3D Systems Cube 2を用いたラピッドプロトタイピングの体験機会の提供、3)Fablab Shibuya見学会の実施、以上の3つとする。なお、本プロジェクトへの参加を希望する学生は事前登録を行うこととする。

2. 研究期間

2014年8月1日～2016年3月31日

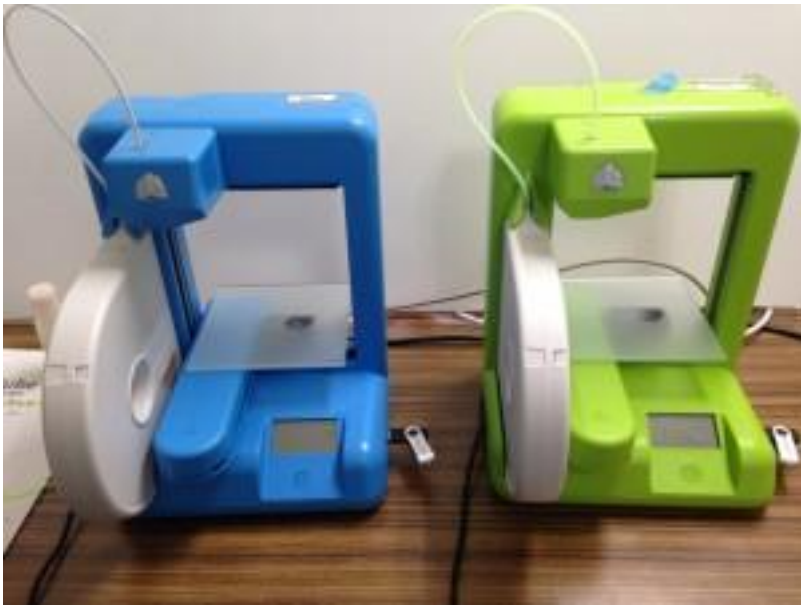
3. 研究代表者 氏名・所属・職名

樋屋 洋亮 グローバル・メディア・スタディーズ学部 助手

4. 研究分担者

氏名 所属・職名(本務先がある場合はその所属・職名)

服部 哲 グローバル・メディア・スタディーズ学部 准教授



SYMPOSIUM: TRANSVERGENCE IN THE ARTS AND MEDIA



国際シンポジウム 「メディアとアートにおける Transvergence」

- 日時:平成24年11月16日(金)~11月17日(土)
- 会場:セルリアンタワー東急ホテル(渋谷) 39階「ルナール」(11月16日), 駒澤大学 246会館6階「6-2会議室」(11月17日)
- 参加費:無料
- 主催:駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ・ラボラトリ「[Shibuya Dreamscape Project](#)」
- 特別後援:公益財団法人 石橋財団
- 後援:大日本印刷株式会社

開催の趣旨

このシンポジウムは、アート、建築、およびメディアの分野に関係する人達を国内および海外から招いて、それぞれの分野に於ける文化の融合と変遷がどのように起こるかを概括し、また、それが我が国が推進しているクールジャパンにどのようにつながっているかを考えます。そこから得られる概念、手法、技術、コンテンツなどが、一つのシステム(メディアスケープ)としてまとめられ明確になれば、今後の我が国の取るべき方向、戦略、政策などに有効に働き、新しいメディア産業の発展にもつながっていくと考えます。

昨今のメディアの進展は、社会やビジネスの在り方に大きな変化をもたらしていますが、その傾向はますます強まっています。この傾向をしっかりと捉え、新しいメディアスケーププラットフォームを創り出し、その社会的意義を認識し、それによる新しいビジネスのイノベーションを主導する事を提案致します。このシンポ

ジュームが、新しいメディア関連ビジネスにおいて世界を主導していくきっかけとなるよう、広範な議論をし、より有意義な国際シンポジウムとしていく所存です

シンポジウムの参加者として、学術、アート、メディアのコミュニティで活躍されている研究者、実務家、アーティスト、デザイナー、ビジネス関係者、この分野に関心のある大学等の学生、大学院生の参加を歓迎致します。

注:「Transvergence」とは、「transform」と「convergence」を結合した造語で、文化の「変換」と「集約」が同時に生じて新しい文化を創造していくという意味です。

プログラム概要

第一日: 渋谷セルリアンタワー東急ホテル — 13:00～17:00

- 講演会形式
- 参加予定者数: 150名、同時通訳あり
- 講演者:
 - Kostas Terzidis (ハーバード大学建築学大学院教授、建築・AIアルゴリズム開発)
 - Marcos Novak (カリフォルニア大学サンタバーバラ校、California NanoInstitute教授、アーティスト&建築家、“Transvergence”の発案者)
 - 夏野 剛 (NTTドコモにてi-モードの立ち上げを推進、現在慶應義塾大学政策・メディア研究科特別招聘教授、ダウンゴ取締役などメディアビジネスでも活躍中)
 - 四方 幸子 (多摩美大客員教授、東京造形大学特任教授、メディアアート、メディアデザイン、キュレーション)
 - Julie Watai (日本人アーティスト&写真家)
 - ラリー久保田 (駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授)

第二日: 駒澤大学246会館 — 10:00～16:00

- ラウンドテーブル討論会
- 参加予定者数: 40名
- 同時通訳なし

事前登録のお願い

次のページから事前登録をお願い致します。

[\[事前登録\]](#)

お問い合わせ先

駒澤大学GMSラボラトリ「メディアとアートにおける Transvergence」事務局:
transvergence2012@gmsweb.komazawa-u.ac.jp

注:「Shibuya Dreamscape Project」は、急速に発展しているメディア技術、ネットワーク技術を統合化、融合化して、我が国の得意とするメディアコンテンツの新しい設計、開発、流通、種々の分野への応用を総合的に追及出来るプラットフォームの実現を目指します。我が国を代表する若者文化の発信基地である「渋谷」の街並みに基づいて構築した仮想空間の中でプロトタイプ構築を最初の目標としているので、表記のプロジェクト名をつけています。これが、スムーズに展開出来れば、海外の多くの文化の中心都市へ移植拡大することが容易に可能となり、クール ジャパンのグローバルな発展を支援出来ると考えています。

アジア・グローバル都市の消費社会・文化研究

(A study of the consumer culture in Asian Globalized cities)

1. 研究目的

本プロジェクトは、シンガポールや上海といった東南アジア・東アジアの先進都市をフィールドとして、その消費社会・文化について実証的に研究することを目的とする。これら非欧米世界の人々の意識・行動に関する経験的データを収集・分析することで、グローバル消費社会における文化的多様性を多角的に検討していく。

2. 研究期間

2014年10月15日～2021年3月31日

3. 研究代表者 氏名・所属・職名

川崎賢一 グローバル・メディア・スタディーズ学部 教授

4. 研究分担者

氏名 所属・職名(本務先がある場合はその所属・職名) 役割

廣瀬毅士 GMSラボラトリ研究員(東京通信大学)理論研究、調査企画、データ分析

伊志嶺絵里子 GMSラボラトリ研究員 理論研究、調査企画、データ分析

5. 研究発表リスト

- (1) 畑山要介・廣瀬毅士, 2017, 「消費社会の変容と高度化: 「21世紀の消費とくらしに関する調査」の結果をもとに」『応用社会学研究』59: 141-154.
- (2) 日本社会学会での研究報告(2017年11月)
- (3) 日本行動計量学会での研究報告(2017年9月)
- (4) Kenichi Kawasaki, 2018, After the Death of Lee Kuan Yew, is Freedom of Artistic Expression Possible in Singapore?, GMS Journal No.21, pp.14-29
- (5) 転換期にあるシンガポールの文化制度: グローバル創造都市の新たな展開、科研費補助金(基盤研究C 2015年度から17年度)研究成果補助金、92頁、2018
- (6) 「グローバリゼーションと新たな都市経済の再構築: グローバル創造都市とシンガポールの観点から」、2018年2月9日、一般財団法人大阪科学技術センター、大阪都市再生部会第74回フォーラム
- (7) Kenichi Kawasaki, 2018, After the Death of Lee Kuan Yew, is Freedom of Artistic Expression Possible in Singapore?, GMS Journal No.21, p.p.14-29
- (8) 川崎賢一、2018、「グローバリゼーションと新たな都市経済の再構築: グローバル創造都市とシンガポールの観点から」、2018年2月9日、一般財団法人大阪科学技術センター、大阪都市再生部会第74回フォーラム
- (9) 川崎賢一、2018、「転換期にあるシンガポールの文化制度: グローバル創造都市の新たな展開」、科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究C、課題番号15K03866)
- 1) 川崎賢一、グローバル化とシンガポール文化、1-39頁
- 2) 川崎・伊志嶺、流動的なシンガポールの芸術支援体制、40-58頁
- (10) Kenichi Kawasaki, 2018, Recent differentiation between two cultural industries by cultural policies: Singapore's Cultural Transformation Since 2012, 18 July 2018 13th World Congress of Sociology, International Sociological Association, RC37: Cultural Production, Power and Inequality

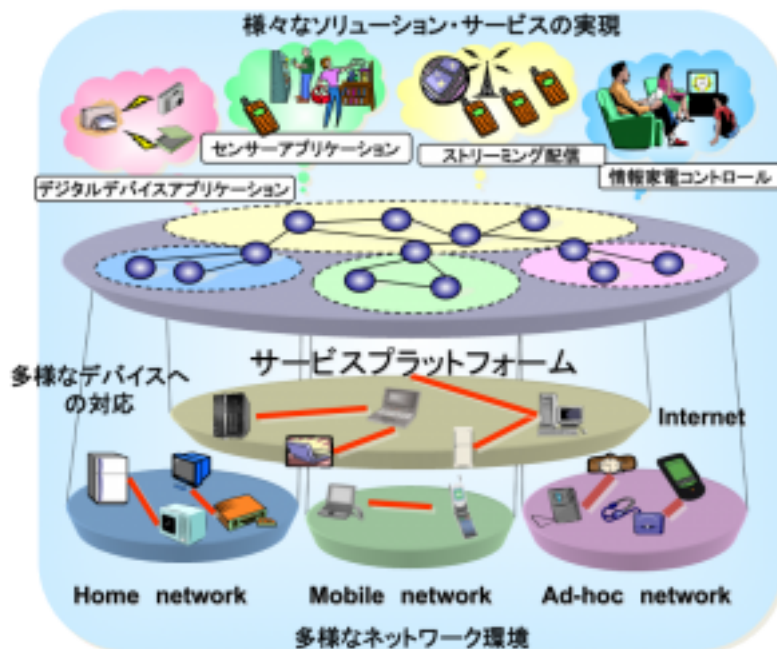
- (11)川崎賢一、進化するシンガポール社会と<多文化主義>、大正大学多文化共生プログラム(講演)、2018年9月6日
- (12)川崎賢一、グローバリゼーションと都市国家の再構築:シンガポールの意味するもの、富山大学ワンアジア財団シンポジウム、2018年9月20日
- (13)川崎・伊志嶺、歴史的変遷からみるシンガポールの芸術支援体制の特徴、日本文化政策学会第12回年次大会、2018年11月24日

オーバレイネットワークを用いた自律分散型デバイス連携研究

(英文名 : A Study of Autonomous and Distributed Cooperation of Devices using Overlay Network)

1. 研究目的

本研究では、デバイスが自律的にネットワークを構築し、メタデータを用いたデバイス間の知的協調活動を実現するための汎用的なメタデータおよびオーバレイネットワークのアーキテクチャを確立することを目的とする。



2. 研究期間

2011年1月1日～2024年3月31日

3. 研究代表者 氏名・所属・職名

石川憲洋 GMS学部教授

4. 研究分担者

氏名 所属・職名 (本務先がある場合はその所属・職名) 役割

槌屋洋亮 GMSラボラトリ研究員 (青山学院大学 助手) ネットワーク

斎藤信男 GMSラボラトリ研究員 (文教大学 客員教授) 国際標準化

5. 成果発表リスト

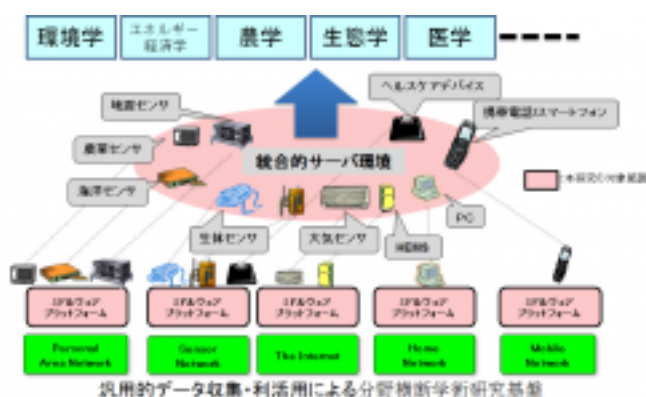
- (1) N. Ishikawa, T. Kato and T. Osano: High-definition Surveillance Camera Control System from Mobile Phones, 8th IEEE Consumer Communications and Networking Conference (CCNC 2011) (2011)
- (2) 伊藤崇洋、加藤悠一郎、峰野博史、石川憲洋、水野忠則: 異種デバイス連携環境のWebサービス化、信学技報、USN 2011-16 (2011)
- (3) 伊藤崇洋、加藤悠一郎、峰野博史、石川憲洋、水野忠則: 異種デバイス連携基盤を用いたセンサ・家電制御アプリケーション、情報処理学会研究会報告、2011-DPS-146 (2011)
- (4) 吉田尚史、松原大悟、石橋直樹、斎藤信男、石川憲洋、竹井光、堀口賞一: 携帯電話による健康管理サービスとそのユーザビリティ評価、情報処理学会報告、2011-CDS-2、No.11 (2011)
- (5) 石川憲洋: 携帯・家電・センサネットワークをシームレスに接続するユビキタスネットワークングに向けたPUCCデファクト標準化と今後の展望、家電ネットワークの今と将来 (チュートリアルセッション)、2011年ソフトウェア大会、電子情報通信学会 (2011)
- (6) N. Ishikawa, PUC Activities on Overlay Networking Protocols and Metadata for Controlling and Managing Home Networks and Appliances, Proceedings of THE IEEE, Vol.101, No. 11, pp.2355-2366, November 2013
- (7) N. Saito, Ecological Home Network: An Overview, Proceedings of THE IEEE, Vol.101, No. 11, pp.2428 - 2435, November 2013
- (8) N. Ishikawa, Overlay Network Protocol and Device Metadata for Controlling and Managing Home Networks and Devices, Invited Speech, 1st IEEE International Workshop on Consumer Devices and Systems (CDS 2013), COMPSAC 2013, July 2013
- (9) 斉藤匠平、石川憲洋、榎屋洋亮: PUCプロトコルを用いたスマートデバイスからのECHONET Lite準拠家電制御システムの開発、情報処理学会研究報告、2014-CDS-11, No.1 (2014)
- (10) N. Ishikawa: Overlay Networking Protocols and Device Metadata for Controlling and Managing Home Networks and Appliances, Invited Paper, 2014 IEEE 3rd Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2014), pp.553-557 (2014)
- (11) S. Saito, N. Ishikawa and Y. Tsuchiya: Development of ECHONET Lite-Compliant Home Appliances Control System Using PUC Protocols from Smart Device, 3rd IEEE International Workshop on Consumer Devices and Systems (CDS 2015), The IEEE 39th Annual International Computers, Software & Applications Conference (COMPSAC 2015), pp.200-204 (2015)
- (12) 加藤剛志、石川憲洋、吉田尚史: 非構造化オーバーレイネットワークにおけるセキュリティ方式の提案とPUCCプロトコルへの適用、情報処理学会研究報告、2016-DPS-166 No.32/2016-CSEC-72 No.32 (2016)
- (13) T. Kato, D. Matsubara, N. Yoshida and N. Ishikawa: Management of OSGi Device Using PUC Protocols and Metadata, 4th IEEE International Workshop on Consumer Devices and Systems (CDS 2016), The 40th IEEE International Conference on Computers, Software and Applications (COMPSAC 2016), pp.306-311 (2016)
- (14) T. Kato, N. Ishikawa, N. Yoshida: Distributed autonomous control of home appliances based on event driven architecture, 2017 IEEE 6th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2017), pp.129-130 (2017)
- (15) 加藤剛志、石川憲洋、吉田尚史: 非構造化P2P/オーバーレイネットワークにおけるセキュリティ方式の提案およびPUCCプロトコルを用いた実装と評価、情報処理学会論文誌、Vol.59、No.2、pp.392-403 (2018)

スマートフォン等を利用したセンサーデータの収集・管理・利活用の研究

(英文名 : A Study of Acquisition, Management and Utilization of Sensor Data Using Smart Devices such as Smartphone)

1. 研究目的

多様なネットワーク、デバイスが混在するM2M/IoT環境では、IPだけでなく非IPネットワークを統合する汎用的なプロトコル、多様なデバイスを統一的に記述するメタデータフレームワークが存在せず、分野ごとの標準化が乱立し、膨大なデータを収集、利活用する汎用的プラットフォームが存在しないため、それらを活用した分野を横断した学術研究は困難であった。そこで、本計画では、以下の3点を目標に掲げ、分野横断学術研究基盤を確立することを目的とする。第一は、PUCG仕様リリース3を実装したスマートフォンアプリとセンサーデバイスの開発である。第二は、上記アプリとデバイスを活用して収集された膨大なセンサーデータなどのビッグデータを分野横断的に利活用するための統合的サーバ環境の開発である。第三は、上記で開発した分野横断学術研究基盤を利活用した実証実験である。具体的な実証実験としては、自治体等と連携したエネルギー管理を含むスマートシティプロジェクトなどを実施する。当初1年間は上記の目標に向けた予備実験を実施する。



2. 研究期間

2016年3月22日～2022年3月31日

3. 研究代表者 氏名・所属・職名

石川憲洋 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授

4. 研究分担者

氏名 所属・職名(本務先がある場合はその所属・職名) 役割
斎藤信男 GMSラボラトリー研究員(慶應義塾大学名誉教授) デファクト標準化
榎屋洋亮 GMSラボラトリー研究員(青山学院大学助手) 研究・開発、実証実験

5. 成果発表リスト

- (1) 槌屋洋亮、石川憲洋: Bluetooth Low Energy を利用したセンサーデバイスからのデータ収集方式、情報処理学会研究報告、2016-MBL-80 No.1/2016-CDS-17, No.1 (2016)
- (2) 槌屋洋亮: 共創の手法を用いた地域センシング -茨城県ひたちなか市那珂湊の実践例から- 情報コミュニケーション学会第15回全国大会 CIS2018.
- (2) Yosuke Tsuchiya, Norihiro Ishikawa, Mobile Crowdsensing from Sensor Devices Using Bluetooth Low Energy (BLE), 5th Annual Conference on Computer Science & Computational Intelligence (CSCI 2018), Dec. 2018.

ビジネスアーキテクチャの研究と実践

(Studies and Practice on Business Architecture)

1. 研究目的

本プロジェクトの目的は、研究シーズの事業化、外部の先進企業との提携、M&A等といったビジネスプロセスを円滑に進める上で、そこで不可欠な構成要素群について、研究と実践を平行して行いながら明確にしていくことである。ビジネスアーキテクチャとは、例えば、医療、Smart home、Smart Cityその他のIoT(Internet of Things)領域におけるビジネスドメイン遂行に必要な構成要素の設計、設計手法の集合体である。

本プロジェクトでは、グローバルなビジネス状況を鑑みて、リファレンスとなる可塑的環境を準備し、グローバルマーケットを睨んで、ビジネスドメイン毎の顧客層、ビジネスモデルの明確化を行い、顧客のニーズに従って必要であれば、事業要素(システム構成、ビジネスモデル、オペレーションモデル等)のピボットポイントを果敢に勧めることができる基本的なフレームワーク群を整備し、ビジネス遂行と平行して、順次それらのビジネスアーキテクチャをオープンラボ形式により、研究、開拓していく。

Consultation for IoT & Data Science

Domain Knowledge

- Data Source
- Semantics of Data
- Legal issues

Data Science

- Data Model
- Analytics Framework

System Architecture

- Building System Architecture
- Rapid Dashboard

2. 研究期間

2016年8月1日～2026年3月31日

3. 研究代表者 氏名・所属・職名

吉田尚史 グローバル・メディア・スタディーズ学部 教授

4. 研究分担者

氏名 所属・職名(本務先がある場合はその所属・職名) 役割

宮崎淳 GMSラボラトリ研究員 (OrangeTechLab CEO) Co-Project Leader、AI、ロボティクス、光学システム、自動化等

久保博 (株式会社エンライブ 代表取締役CEO) IoT、AI、画像処理等

Manal EL AKROUCHI (Internship at OrangeTechLab Inc.)

5. 業績

[1] Naofumi Yoshida, Jun Miyazaki: A Multi-Disciplinary Approach of Business Architecture and its Business Intelligence Applications for IoT Big Data, The 21st World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics: WMSCI 2017, July 8 – 11, 2017 – Orlando, Florida, USA, 2017.

[2] Jun Miyazaki, “Data Economy”, The 21st World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics: WMSCI 2017, July 8 – 11, 2017 – Orlando, Florida, USA, 2017.

<http://www.iiis.org/keynotespeakers-2017.asp>

[3] 宮崎淳, 吉田尚史, ビックデータ分析プロトタイプのためのデータ生成方法とその人事データへの応用, 第8回ソーシャルコンピューティングシンポジウム, 2017年6月23日(金), 24日(土), 2017.

Studies and Practice on Business Architecture

1. Purpose

The purpose of this project is to clarify a business architecture for deep learning based IoT (Internet of Things) application architecture in business. In IoT, collaboration among domain knowledge experts, data scientists, systems architects, and total system consultants are inevitable. Because each specialty is totally different and it is hard to cover all of knowledge in one person. The role of consultants is important how they can coordinate these multi-disciplinary people and knowledge, and manage to create architecture for domain specific IoT applications, such as healthcare, autonomous driving, smart city, and smart home, etc. We show how these multi-disciplinary people interact, design and implement business oriented deep learning applications. In many cases, even domain knowledge people cannot tell where such data are hidden in the companies and how should be analyzed. In business applications, to show rapid prototyping system as Proof of Concept (PoC) is also important for these multidisciplinary people and business executives to discuss the effectiveness and direction of data analysis.

2. Term of Research

August 1st, 2016 – March 31st, 2018

3. Principle Researcher

Naofumi Yoshida, Faculty of Global Media Studies, Professor

4. Researchers

Yutaka Ujii (SBF-Consulting CEO)

Jun Miyazaki, GMS Laboratory Researcher (SBF-Consulting CTO, P&A LLC CTO) Co-Project Leader

Hiroshi Kubo (Enlive Inc. CEO)

Manal EL AKROUCHI (Internship at OrangeTechLab Inc.)

5. Papers

[1] Naofumi Yoshida, Jun Miyazaki: A Multi-Disciplinary Approach of Business Architecture and its Business Intelligence Applications for IoT Big Data, The 21st World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics: WMSCI 2017, July 8 – 11, 2017 – Orlando, Florida, USA, 2017.

[2] Jun Miyazaki, "Data Economy", The 21st World Multi-Conference on Systemics, Cybernetics and Informatics: WMSCI 2017, July 8 – 11, 2017 – Orlando, Florida, USA, 2017.
<http://www.iiis.org/keynotespeakers-2017.asp>

学生のキャリア支援ツール開発

(英文名 : Development of Career Support Tools
for Students)

1. 研究目的

学生向けのキャリア支援ツールを学生自身が開発することを通じて、自らのキャリア開発に関する意欲を高める手法を開発する。

2. 研究期間

2016年4月1日～2020年3月31日

3. 研究代表者 氏名・所属・職名

山口浩 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授

4. 研究分担者

山口由美子

社会とメディア研究プロジェクト

(英文名: Research Project of Society and Media)

1. 研究目的

近代において著しい発展を見せたマスメディア等のメディアがどのような社会背景のもとに生まれ、どのような社会的作用を及ぼしたかという点についてグローバルな視点で研究する。

2. 研究期間

2018年4月1日～2024年3月31日

3. 研究代表者 氏名・所属・職名

服部哲 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部准教授

4. 研究分担者

川崎賢一 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授
白水繁彦 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ・ラボラトリ研究員

5. 成果発表リスト

- (1)白水繁彦(2018)「エスニック・メディアの社会学的研究:ハワイ日系新聞最盛期の新聞人の事例」駒澤大学ジャーナリズム・政策研究所『研究所年報』35号. pp.85-110.
- (2)白水繁彦(2018)「ハワイ日系人の社会史:日本人移民が残したもの」日本移民学会編『日本人と海外移住』明石書店
- (3)白水繁彦(2018)『海外ウチナンチュ活動家の誕生:民族文化主義の実践』御茶の水書房
- (4)白水繁彦(2018)「ウチナンチュ・ボランティアのアイデンティティと民族文化主義~ハワイの「オキナワン・フェスティバル」における半構造化インタビュー【I】~」駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部『Journal of Global Media Studies』Vol.23. pp.1-30.
- (5)白水繁彦(2019)「ウチナンチュ・ボランティアのアイデンティティと民族文化主義~ハワイの「オキナワン・フェスティバル」における半構造化インタビュー【II】~」駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部『Journal of Global Media Studies』Vol.24. pp.1-31.
- (6)SHIRAMIZU, Shigehiko(2019)“A Sociological Study of Ethnic Media —A case of Hawaii?s Japanese newspapers before WWII—”武蔵大学社会学部『ソシオロジスト』No.21. pp. 101-119.

6. その他の業績

公開研究会 2018年5月～2019年1月 合計9回開催

政治・社会・文化のグローバル・メディア・スタディーズ 音・画像・映像・テキストをめぐる学際的研究

1. 研究目的 = Purpose

本プロジェクトの目的は、多様なメディア表現とそれを支えるテクノロジーが、われわれの身近な、そして地球全体の政治・社会・文化のあり方をどのように規定しているかを明らかにすることである。具体的には、グローバル関係学、プルリバーズ論、マルチプル・コスモロジー論、人新世論、グローバルIRなどの最新の研究動向を踏まえつつ、身体知に根ざしたワークショップ、フィールドワークなど多様な手法で学際的かつ相互作用を重視した研究方法を採用する。グローバル・メディア・スタディーズの理論的・実践的基盤の構築に貢献する。

This project is designed to investigate how the diverse media expressions that continue to be generated around the world and the technologies that support them construct politics, society and culture in our daily individual life and the whole globe. Specifically, we will employ interdisciplinary and interaction-oriented research methods using a variety of methods such as workshops and fieldwork rooted in acquiring embodied knowledge, while taking into account the latest research trends in Relational Studies on Global Crises, studies of Pluriverse, Multiple Cosmologies, Anthropocene, and Global IR, etc. The project aims to contribute to the construction of the theoretical and practical foundations of global media studies.

2. 研究期間 = Schedule

2022年6月1日～2023年3月31日(次年度も継続予定)

From June 1st, 2022 to March 31st, 2023 (to be extended in the next year)

3. 研究代表者 氏名・所属・職名 = Project Leader

芝崎厚士 グローバル・メディア・スタディーズ学部 教授

Prof. Dr. Atsushi Shibasaki: Faculty of Global Media Studies

4. 研究分担者 = Project Member

氏名 所属・職名(本務先がある場合はその所属・職名) 役割

1. 田中公一郎 株式会社 アジア学芸集団 代表取締役、上智大学非常勤講師、国際関係論、音楽社会学 音・映像を中心とした分析

1. Koichiro Tanaka. CEO, Asia Art Alliance Co., Ltd, Part-time Lecturer, Sophia University: International Relations, Sociomusicology

5. 研究発表リスト = Publications, Presentations, etc.